

平成 30 年 6 月 16 日現在

機関番号：15501

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H07005

研究課題名(和文) 土楼建築の建造過程と親族組織の再編に関する社会人類学的研究

研究課題名(英文) Social Anthropological Study on Construction Process of "Tulou" and Reorganization of "Zongzu"

研究代表者

小林 宏至 (KOBAYASHI, HIROSHI)

山口大学・人文学部・准教授

研究者番号：40781315

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：中国福建省西南部の客家土楼は、複数の宗族、あるいはひとつの大規模宗族によって建造されてきた。これらの土楼群の建造過程と宗族組織(漢族の父系出自組織)の再編は密接に関係している。本研究では、特定の土楼内の居住者が新たな土楼を建造する際、複数の房にまたがって資金や労働力を提供する状況を明らかにした。これまで宗族を議論する際に一般的であった、特定の房が不均衡に発展して財を形成する事例とは異なる状況を示すものである。また土楼居住者は、数世代同じ場所に居住することにより、特定祖先を選出する可能性があることを指摘した。土楼の建造年代が新しい場合は、この傾向は見られない。

研究成果の概要(英文)：Hakka's traditional circular houses (Kejia Tulou), found in the southwestern part of Fujian, China, have traditionally been built by a large-scale Zongzu (Han Chinese patrilineal organization) or several Zongzus. The construction process of these Tulous and the reorganization of Zongzu are closely related. This study revealed that when people who had lived in Tulou built new Tulou, that funds and labor were provided not by one Fang (Han Chinese households) group but by multiple Fang groups. This case study shows a situation different from cases in which a specific Fang group develops unequally in Zongzu organization and that Fang group forms property, it was commonly seen in previous discussions of Zongzu studies. Also, the researcher of the project pointed out that there is a high possibility of Tourou house residents who have been living in the same place for several generations electing a specific ancestor. If the building is new, however, this trend cannot be seen.

研究分野：社会人類学

キーワード：客家 土楼 宗族 民間建築 アフォーダンス

1. 研究開始当初の背景

中国社会は改革開放政策後の1980年代になって徐々に文化・社会人類学的なフィールドワークが可能となり、2000年代頃から本格的に国外の研究者が実地調査を行えるような状況になった。そのため中国各地の諸民族、諸社会の報告は行われてこなかった。

本研究課題で調査対象となる土楼建築も、今でこそ世界文化遺産に登録されているが、それが「発見」されたのは1950年代であり国内外の諸機関に知られるようになったのは1980年代後半に入ってからであった。そのため未だに調査されていない民俗知識、社会慣習が多数残っている。

しかし2000年代から急速に市場経済化が進み、現地社会の民俗知識、社会慣習は驚くべき早さで「変化」している。土楼は文化遺産である前に、彼らにとっての住居であったが、社会状況の変化に呼応するように土楼内の居住者も減少を続け、文化財としてではなく家屋としての経験を持つ人々も少なくなっている。そのため現在彼らの「語り」や知識を記録しておくことは急務であり、本研究課題では、現在の土楼建築に関わった世代に聞き取り調査を行うことで、民間建築としての土楼と社会組織についての調査を行った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、中国福建省の民間建築である土楼の建造過程と漢族の父系出自集団である宗族の再編過程の分析を通して、家屋と社会集団とのインタラクティブな関係を描き出すことである。本研究で明らかにされるのは、家屋が社会集団の再編成に大きく作用しているということであり、これまで人間主体に重きが置かれてきた研究視座、すなわち「人間が建物を造る」という観点からだけでなく、「建物が社会集団を創る」という観点からも議論を行い、建物と社会集団との関係性を問い直すことである。

3. 研究の方法

福建省永定県の各地域を訪問し、土楼居住者および旧土楼居住者の土楼内部の現在の所有形態、およびかつての所有形態を聞き取り、どのようにメンバーシップが確定していたのかを確認する。その具体的な方法として以下の4つの手順をとった。

親族集団のなかでも指標となるような祖先を複数選択(記号化)し、それを基準に、現在、土楼に居住する社会集団を便宜的に記号化していく。

土楼内部の図面を作成し、その内部の各セクションの所有者が誰であるかを明らかにし、で示した親族組織の記号名と対応させる。

土楼内部の所有者の変遷を調査する。と

りわけ調査地の人々の記憶が鮮明である1970年代以降に造られた土楼を対象とし、どの土楼からどのような人々が労働力として、あるいは出資者として参加し、どのような経緯で新たな土楼の所有権、所有者が決まっていたかということを確認する。

土楼内部の所有者の変遷を明らかにした上で、いかにしてメンバーシップが確定するかを整理し、社会集団が再編される経済的、社会的、政治的背景を考察する。

4. 研究成果

本研究課題では中国福建省の複数の地域を対象に、親族組織と土楼建築との関係性を調査してきた。対象とした調査地内において移住を伴う土楼の建造において、複数の分節からの居住者の選定が行われていること、複数宗族に跨って土楼の建造が行われてきたことが明らかとなった。これにより、研究代表者が仮説として立てていた土楼建築と親族組織の連続性に関して、より確度の高いデータが得られることとなった。

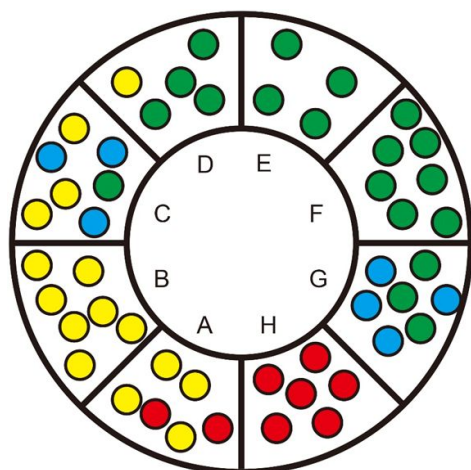
これまで明らかになったのは下記の3点に絞られる。

土楼という民間建築が建造される際は、特定の宗族の房(世帯を共にしている人々)だけではなく、多くの房の協力によってそれが建造された。場合によっては、宗族(氏族)を越えて、財や労働力が提供されることもあった。これは漢族社会における家屋の発展形態としては、非常にまれなケースと言える。このような状況を可能にした原因として、宗族が大規模であること、土楼という巨大な集合住居が当該地において広く一般的な住居として認識されていたことが挙げられる。

土楼は数百年にわたって、数世代に引き継がれるが、そのなかで土楼内の居住者は移り変わる。特定の系譜の者が勢力を大きくすることもあれば、特定の宗族の成員が勢力を大きくすることもある。数百年というスパンのなかで居住者が移り変わり、土楼内において特定の祖先を中心とする人々の居住者が増え、マジョリティが誕生しうることが明らかとなった。その際、土楼内の空き室は系譜に関係なく利用されることがあることも明確となった。つまり土楼建築内の各部屋の所有形態は、それぞれの系譜によって固定化されているのではなく、数百年というスパンのなかで変化しうるものなのである。また変化しうるため土楼は住居として維持されてきたともいえる。

例えば下記の図は、ある土楼内部の系譜と居住形態を対応させたものである。黄色、青、赤、緑は、18世の祖先を基準にしてみた場合、それぞれ異なる祖先を持つ者たちであることを意味する。A~Hまでの記号は、土楼建築内の8つの区画を表している。図を見ても

分かるように、それぞれの色(18世祖を基準に見た場合の現在の所有者、つまり24世~27世までの人々)は、比較的家屋の形状に対応する形で、各区画を利用しているのが分かる。しかし、それが完全に一致しているわけではない。これは世代を追うごとに、土楼内の居住区分と系譜の区分が曖昧になっていくためである。



図：ある土楼内の区画と所有者

祖先を中心とした紐帯で土楼の居住者はまとまりをみせる、とこれまでの研究では指摘されてきたが、土楼内部には祖先を祀る祖堂が存在しない。しかし、数百年単位の歴史を有する土楼には、特定の祖先の子孫であるという語りを持つことが多い。この点に関して、土楼の居住者の変遷に合わせて、祭祀対象の祖先が便宜的に決定されるということを指摘した。これは複数の村落に見られることであり、興味深いことに歴史が浅い土楼には見られない現象である。大規模宗族において祖先が政治的に決定されるということはこれまで多くの先行研究で報告されてきたことであるが、そこに土楼という居住者を限定する家屋の物理的な作用が大いに関係していることを明らかにした。

現地調査時には計測機器を用いて土楼の計測を行い、精度の高い実測データを得ることもできた。これらのデータはCAD等のソフトを用いて、視覚にも分かりやすい形で研究成果を広く一般に公開する予定であるが、本研究課題(スタートアップ支援)の実施期間内(採択決定通知から1年半)にはそれを十分にかねえることが出来ず、成果報告としては課題を残すこととなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

小林宏至「客家地域における閩南文化——

分水嶺を越境する神様の「里帰り」」『やまぐち地域社会研究』14号、2017年3月(査読有)

〔学会発表〕(計 5 件)

小林宏至「作为历史的文物与作为记忆的文物 - 以中国福建省永定县的客家土楼为例 - 」国立大学国際ワークショップ、文化聚落 共有財：環境变迁下之永续发展、2018年2月5日、国立台北大学、桃園、台湾

小林宏至「ローカルな観光資源とグローバルなメディア表象 - 中国客家社会にける福建土楼を事例として - 」北海道大学国際広報メディア・観光学院、メディアと社会のエスノグラフィ - メディア人類学の基盤研究、2017年7月21日、北海道大学、札幌

小林宏至「宗族が造り出す家屋、家屋が創り出す宗族」山口中国学会、2016年度山口中国学会研究大会、2016年12月17日、山口大学、山口

小林宏至「呼称と社会集団 中国福建省客家社会を事例として」山口地域社会学会、第42回山口地域社会学会・日本村落研究会九州地区合同研究例会、2016年11月12日、山口大学、山口

小林宏至「行政主導の「聖地」づくり:客家「聖地」からみる文化表象のポリテクス」日本文化人類学会、日本文化人類学会第50回研究大会、2016年5月29日、南山大学、名古屋

〔図書〕(計 2 件)

小林宏至「第4章 社会的住所としての宗族 福建省客家社会における人物呼称の事例から」、瀬川昌久・川口幸大編『宗族と中国社会 その変貌と人類学的研究の現在』、風響社、2016年5月、pp.137-171

小林宏至、他「座談会 現代中国におけるフィールドワークの実践」、西澤治彦・河合洋尚編『フィールドワーク 中国という現場、人類学という実践』、風響社、2017年6月、pp.209-223、

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小林 宏至 (KOBAYASHI Hiroshi)
山口大学・人文学部・准教授
研究者番号：40781315

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()